



アメリカ人気質

弁護士 坂田 均
risakata@kclc.or.jp

イラク戦争もようやく終わり平和が訪れました。今回の戦争は、ご存知のようにアメリカ政界に最近台頭してきたいわゆるネオ・コンサーバティブといわれる対外政策強硬派によって主導されたものでした。この戦争の正当性については議論のあるところですが、9・11事件以来アメリカ人の間に充満していたテロに対する怒りが、この少し強引な戦争を支持したことは衆目の一致するところですが、常に冷静で、合理的思考を旨としているアメリカ人が、時折見せるこの種の単純さと怒り。アメリカ人は自分達のこの気質を少し恥ずかしそうにテンパーと呼びます。

私は、1985年頃アメリカに住んでおりましたが、そのときお世話になった人々に対する感謝の気持ちは忘れることができません。フィラデルフィア近郊のカレッジビルという小さな町で出会った人々です。

イートン博士は、私が留学していたカレッジのスペイン語の先生で留学生のためのアドバイザーをしていました。体重100キロはゆうに超す大きな女性です。私は、イートン博士に翌年にはロースクールに行きたいと伝えていました。すると英語力の強化が必要であると考えた彼女は、毎日授業が終わった後彼女のオフィスに来るように命じ、それからは毎日英語のトレーニングでした。国際政治の授業で議論についていけず困っていると、早速担当の先生と相談し、それからは授業のはじめに必ず当てられるようになりました。その授業はその後「Hitoshi」という言葉で始まるようになります。また、当時、私は妻子を伴って留学していましたが、慣れない外国生活に妻もかなり苦勞していました。私から家族の生活状況を聞いたイートン博士は、妻にもリフレッシュが必要と判断し、早速妻を心理学科の聴講生として登録しました。授業中の子供の面倒は、大学

からベビーシッターが派遣されました。これらはすべて無償の好意によるものです。

アンダーソン氏。彼は、電気メーカに勤める技師で、毎週彼の自宅に訪問して約1時間よもやま話をしていました。ロースクールへの出願が目前に迫ったころ、私は、ステイトメントがうまく書けなくて悩んでいました。彼に相談すると、早速起案を見せろといいます。それからは、連日内容を二人で点検し修正を加えていきました。日本的な自己アピールではだめだということで、徹底的に書き換えさせられました。彼は、その後、私がニューヨーク大学で修士論文を書いているときも、何度も電話でアドバイスをもらっていました。そして、締め切りの近づいたある日曜日、突然私の自宅に現れました。その日、彼は夜遅くまで私の修士論文と格闘していました。

アメリカは内陸部に広がる広大な大地に住む人々によって成り立っています。彼らを抜きにしてアメリカを語ることはできません。アメリカは意外に農業国家で全米に広がる小さな町の住人の考え方や生き方は、政治家やエリートビジネスマンとは大きく異なります。とても単純素朴で善意にあふれた無名の人々が国を支えているのです。私のお世話になった恩人たちも、アメリカを支えるこれら無名の人々に属しています。私の留学生活はこれらの恩人なしには、到底成り立ちませんでした。彼らの無償の好意にはただ頭が下がるのみです。アメリカ人の利他の精神を学んだ3年間でした。

アメリカ人が時折見せるテンパー、そして彼らの偉大な利他の精神、どうしてこのような気質が生まれたのかよく分かりませんが、私がアメリカ人を考えるときのキーワードにしています。